

郷土史探訪

ささやかな記録

浜脇の横穴墓群おうけつぼ

朽ち果てようとしている遺跡

入江 秀利

昭和六四年頃だったでしょうか。浜脇中学校に勤めていたときに、突然新聞記者の訪問を受けました。取材の趣旨は「昨日、金比羅山の横穴古墳*（以後横穴墓）前で、ホームレスの男性の焼身自殺があった。記事にするので浜脇の古墳の事について話して欲しい」と言うことでした。その記者は、この騒ぎで浜脇の横穴墓の存在を知ったと云うことでした。

金比羅山や芝生しばうの横穴墓は、子供の私が考古学に興味を持つ切っ掛けになった縁の深い古墳です。昭和八年に鳥居龍蔵博士が書いた「別府市誌」の第二章「上代遺跡（二三―五九頁）」を何度も読みました。横穴墓の写真、分布状態略図、横穴墓のスケッチが載せられていて、身近にある芝生・平原横穴墓群、金比羅山横穴墓群、矢ノ林、宇土の横穴墓に強く惹かれました。

少年のある日、金比羅山横穴墓の一つにおっかなびつくり入ったことを思い出します。薄暗くてひんやりした黄泉よみの世界でした。

戦時中、隣保班で金比羅山に防空壕を掘りました。浜脇の旅館街が亀川海軍病院に家屋徴用されてきましたから、白衣の傷病兵が大ぜい鶴嘴つるはしを振るいモッコ担いで、医療器具庫や薬品庫用の横穴を掘りました。地区の人は白衣が敵機の爆撃よけになると思い、兵隊さんと和氣藹々わきあいあいで防空壕を掘りました。金比羅山の地底は、いつの間にか蟻の巣のようになった、など云われました。崖の地質が阿蘇凝灰岩ぎょうかいがんですから、昔も今も掘りやすいのです。今では横穴墓と防空壕がよく間違えられます。

それにしても、浜脇の横穴墓群はいつ頃から造られ、副葬品などからどのように位置づけられ、また、どんな人が葬られていたのでしょうか。なぜ横穴墓は浜脇にしかないのでしょうか。少しでも明らかにできればと思います。

※横穴・横穴墳・横穴古墳と呼ばれている。古墳時代から奈良時代初期に造られた古代の墳墓の一つの形を云う。丘陵などの斜面や断崖を横穴状に掘込んだもの。墳丘を伴わないのが一般的であるため、「古墳」と呼ばず、一般に「横穴墓」と呼んで区別している。

一 古墳時代と古墳

最初に古墳について簡単に触れておきます。

現代の学者はいつ頃からの墓を「古墳」と呼ぶようになったのでしょうか。大きな瓶かみの口を合わせて棺にして、遺体を葬っていた弥生時代の墓は合口甕棺墓あわせぐちのかめかんと云って古墳とは呼びません。卑弥呼の墓は多分古墳でなく甕棺だったと思われる。石垣地区の弥生遺跡から小児甕棺が発見されています。

古墳とは、塚を築いて石室に遺体を葬った墓のことです。四世紀ごろ大和政権が誕生して、奈良盆

地を中心にして、塚を築いて池を巡らした前方後円墳が造られるようになりました。ほぼ四世紀頃から七世紀におよぶ時期を一般的に古墳時代と呼びます。

古墳時代は前・中・後期に区分されています。

前期は大和政権が全国を統一する時期で、政権に組み込まれた豪族は大和に習って前方後円の墓を造り、下賜された銅鏡などの副葬品を納めて埋葬しました。この頃はたてあなしきせきしつ「たてあなしきせきしつ」と云われ、後円部にたてあなしきせきしつ「たてあなしきせきしつ」を掘って石棺を納めるのが主流のようです。

中期は五世紀ころに始まります。応神天皇や仁徳天皇に代表されるおおまみ「おおまみ」が現れます。土木技術も進んで大形の古墳が造られました。

大陸からの様式を取り入れて、よだあなしきせきしつ「よだあなしきせきしつ」の新しい墓を造るようになりました。中期末から後期にかけて、この横穴式古墳がしだいに広がります。この古墳は平地に石室と通路、入口（門）などを造り付けて封土を盛り上げ塚にします。だから、墳丘の横に入口があるのが特徴です。巨石の運搬、組立て、土を搗き固める（版築）※土木工事の技術が進んだので、労力が少なくて済みむようになりました。五世紀の後半から六世紀にかけて社会が変化して、地方の有力者階層が小規模な横穴式古墳を造るようになり、古墳も群集墓などが現れました。副葬品も武器から農具や身の回り品が多くなり、新しく作られるようになった灰色で堅く焼かれた※すえき「※すえき」なども沢山出土します。

別府では後期の六世紀後半に、鬼の岩屋古墳や次郎※・太郎塚古墳のような小規模の古墳が造られました。鬼※の岩屋古墳（国指定）は巨岩で組み立てた横穴式石室を持つ、県下で代表的な古墳です。

同じ時期に横穴おうちつぼ「おうちつぼ」が造られます。横穴墓の内部は横穴式石室同じように造られています（100頁）。

浜脇の横穴墓も六世紀終わりから八世紀にかけて掘られたようです。ちょうど飛鳥時代、白鳳時代から奈良時代初期に当たります。

横穴式古墳も横穴墓も羨道の入口を開くと、玄室と云う埋葬室に入ることが出来ます。だから追葬が出来ないように、数代続く「家の墓」になったようです。

古墳は「大化薄葬令」によって規模を制限されるようになって、次第に姿を消すようになりました。

※版築 大陸から伝えられた工法 一定の厚さに積んだ赤土や砂をつき固め、それをくり返して土を盛り上げる方法。

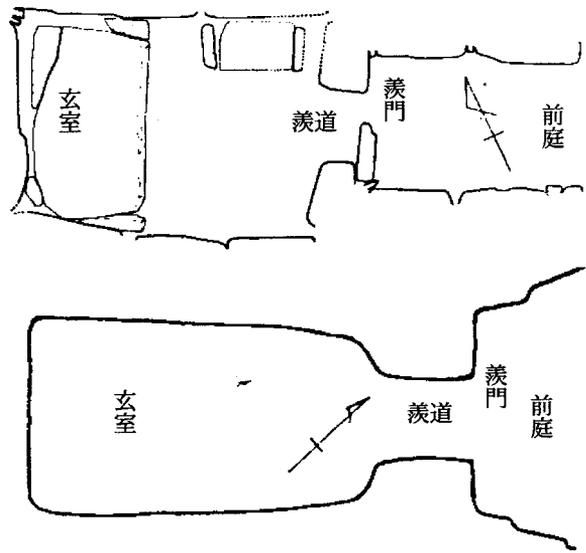
※須恵器 半島から伝わった工法 ろくろを使い高温で焼いた黒灰色の陶器。六世紀頃は祭器だったが、次第に日常雑器として使われるようになった。

※次郎・太郎古墳 実相寺古代公園にある古墳、発掘はされていないが近所の天神畑古墳から横穴式石室が出土したので、同じような石室があると思われる。(市指定史跡)

※鬼の岩屋 一号・二号がある。後期古墳時代の代表的な安山岩の巨石を組み合わせた横穴式石室を備えた古墳。(国指定史跡)

横穴墓

「大分の歴史事典」では、これまで約二五〇か所の遺跡で横穴墓が確認されており、総数は三千基以上におよぶと書いています。考古学雑誌「九州横穴の形式と時期・佐田茂」(第十六卷一号)は大分県のなかに、別府の金比羅山横穴群(26)、平原横穴群(24)をあげています。横穴墓は「百穴」



とも呼ばれ一か所に多数の横穴墓が群集するところもありません。

横穴墓は県下ほぼ全域に分布していますが、特に筑後川上流域の日田地方、大分川下流域の大分市、山国川流域の三光村や中津市、駅館川流域の宇佐市、大野川流域の竹田市などに集中しています。

古墳時代後期に横穴墓は横穴式古墳とほぼ並行して造られましたが、横穴墓は内部の形や副葬品などから初期、最盛期、後期に分けられるそうです。葬られた人は横穴式古墳に葬られた人より身分的に更に低い階層の人ようです。八世紀になると上流階

層に仏教がひろまって、横穴式古墳とともに横穴墓も姿を消します。

横穴墓の墓室

上は横穴式石室（鬼の岩屋2号墳）、下図は横穴墓（浜脇）の床面の図です。

玄室は死体を納めた部屋で、羨道は入口から玄室に通じる通路です。上の2号墳では石扉が左に開いたままの状態が残っています。

横穴墓の玄室は下図のような羽子板形や方形、長袋や円形があります。天井はドーム形、アーチ形

や屋根形に造られています。(浜脇横穴墓104・105頁参照)

一般に初期の横穴墓は羨道が短かくやや下向きに玄室へ通じています。天井部は屋根形やドーム形したものが多いと云われます。

最盛期は六世紀代が中心で、全体的に玄室や羨道が整備され、玄室のプランが方形や縦長、横長になり、羨道が長くなります。

後期は七世紀代が中心で、全体的に規模が小さいものが多く造りが雑になります。また、羨道も短くなり天井も低くなります。特徴としては高田市の穴瀬横穴のように、入り口部に同心円や人物らしい文様が描かれた装飾横穴も見られます。

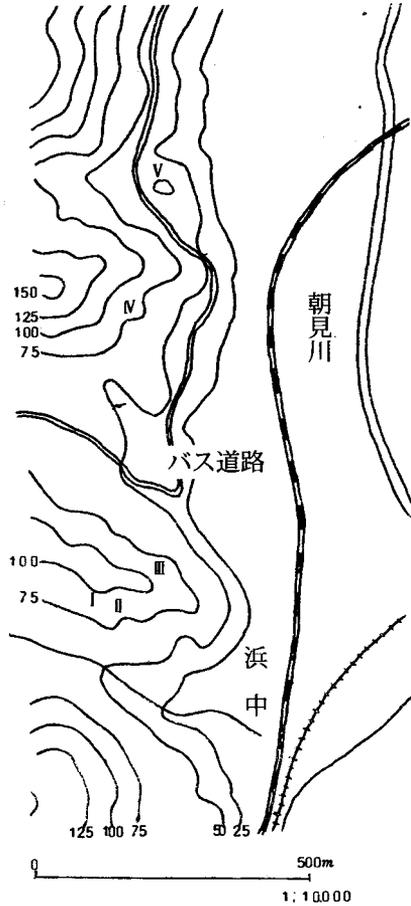
二 浜脇の横穴墓群

芝生・平原の横穴墓群は穴森道添右側、笹川墓地西側の急斜面、金比羅山横穴墓群は浜脇中学校裏の金比羅山登り道中腹右手の崖、矢の林横穴墓はもとの小百合愛児園の裏山、宇土横穴墓はバス道路下の急斜面にあります。

これから用いる資料は、昭和四五年、市教委の研究紀要「浜脇横穴墓(古墳)の分布と実態 入江秀利」を参考にします。一人で横穴墓に潜り込み計測した時のことを思い出します。私が入れない横穴には、幼稚園児だった息子をもぐり込ませたこともありました。三五年前の素人の記録ですから、曖昧なところも多いのですが、その後、正式な調査が行われていませんから正確な記録はありません。

平成二〇年現在は、自然崩壊も含めて残念ながら当時に比べるとさらに荒れています。

浜脇横穴墓群の分布図



- I 平原横穴群
- II 芝生横穴墓群
- III 金比羅山横穴墓群
- IV 矢ノ林横穴墓群
- V 宇土横穴墓群

浜脇横穴墓が多数群れ
ているのは上図のⅢ金比

羅山横穴墓群(26)、下図のⅡ芝生横穴墓群(10)、Ⅰ平原横穴墓群(13)です。次頁の分布図は「別府市誌・昭八」図を使いました。

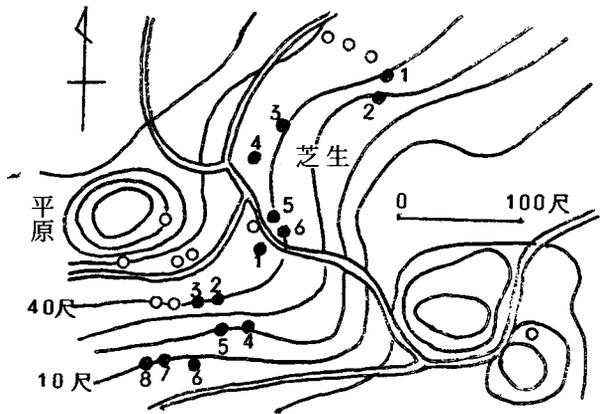
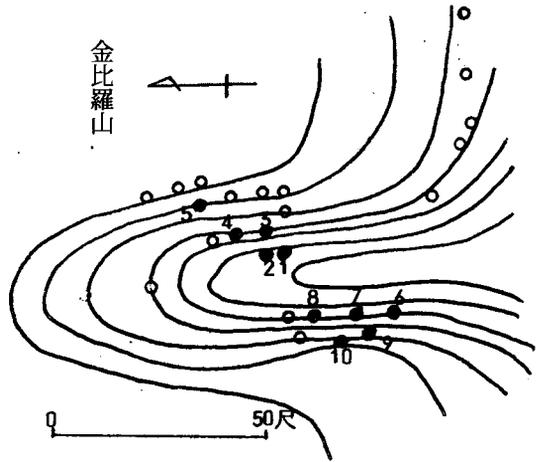
●は横穴墓としての形が認められるもので、羨門や羨道が認められるものです。○は崩壊の著しい横穴墓で、表土がずり落ち羨門や羨道が崩壊して玄室が露出している横穴墓です。多くの場合土砂やゴミがたまった状態です。調査して三五年経っていますので、その後に崩壊して、姿を消したものも数多くあると思います。

現に何年か前の台風の後、平原の2, 3号の左にある○の横穴の表土がはげ落ちて赤土の崖に二個の玄室がポツカリと口が空いていました。

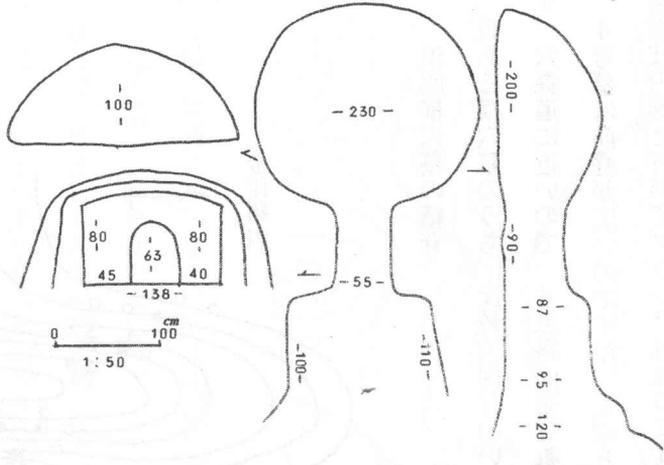
浜脇横穴墓の紹介

数ある横穴墓のうち、比較的保存のいいものを紹介しておきましょう。平原の4、5号の横穴墓です。穴森道に近いので一寸急斜面を登れば見ることが出来ます。

4号墓は前庭が広いのですが、玄室と羨道を合わせた内部の長さは双方ともあまりわかりません。玄室は円形と方形でプランは異なります。



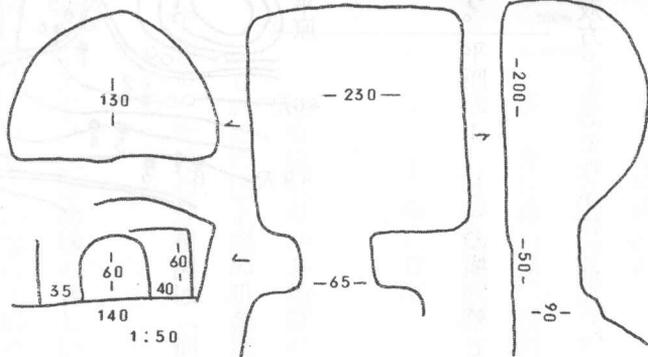
平原4号



4号



平原5号



玄室の天井はどちらもアーチ形ですが、4号の方がやや高くなっています。羨門せんもんに裝飾はありません。

ただ、5号墓は大きな木の根が羨門から羨道に向かって食い込んでいます。

平原の1号墓は外見は立派ですが、崖を登らなければ入れません。

芝生横穴墓群の3号墓は死床ししじょうがあります。死床とは死体を横たえるベッドのことです。私が調査したうちで死床がある横穴墓はこの3号墓だけでした。ベッドは左側に少し高く造られています。

珍しいものでは金比羅山横穴墓

芝生3号

矢の林独立墓

の中に、穴を掘ったとき壁を削った鑿の跡が残っているのがありません。たしか9号だったと思います。

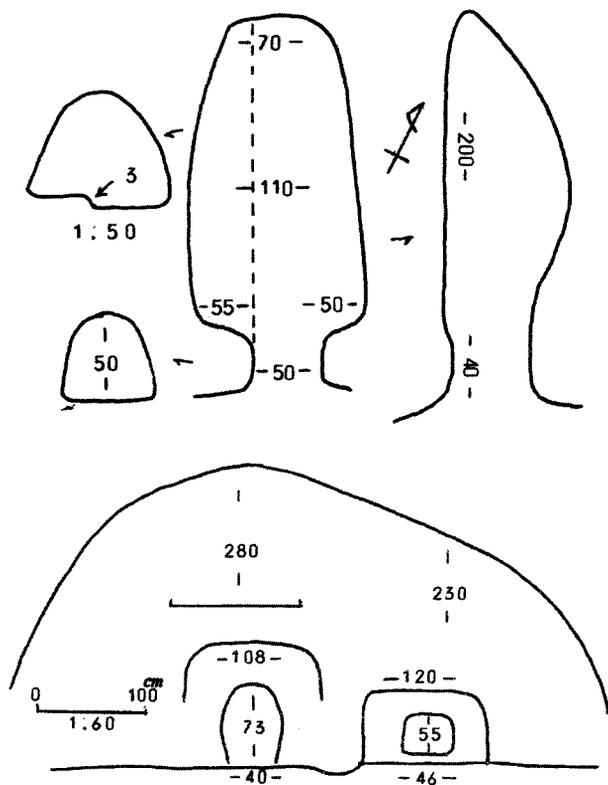
鑿の幅は約10〜25センチあります。

矢の林には独立した砂岩に、二つ並んだ横穴墓があります。独立二穴形式のものは浜脇横穴墓群で此処だけでした。

また、宇土のバス道路下の崖にも独立した砂岩に横穴墓が三個あります。ちょうど朝見のうえ辺りでしょうか。この横穴墓で木炭と

枕石、中年の大腿骨が出土したと云われます。陣場にも横穴墓が一個あります（私は未確認）。これら三ヶ所の横穴墓は、金比羅山を中心にした横穴墓群の種族とは別の更に小規模な種族のものと考えられます。

最近、浜脇横穴墓群の崩壊が激しいようです。一三〇〇年間自然に守られてきた貴重な史跡が、きちんとした記録も残されずに、私達の時代になって朽ち果ててしまうのは実に残念です。



副葬品と被葬者

埋葬された人々の文化や社会、横穴墓が造られた年代など判断することが出来ます。

浜脇横穴墓群は全て開口されていたそうです。かつて金比羅山横穴墓内や周辺の土地から副葬品が見えられて、浦田の修福寺に大切に保管されています。

金属器では鉄製の轡くつわ、鏡板など馬具の破片、鍍金の耳環じかん、管玉くだたま、句玉まがたま、切子玉きりこたま、白玉うすたま、ガラス丸玉など装身具、須恵器すえきの器の破片、鉄釘、土錘どすい、鉄鏃てらざくなど生活用具があります。金比羅横穴墓の下に農地をもつ友永直氏が畑から見事な須恵器の瓶を掘り出しています。鉄釘は長い角釘で木棺に打ち込まれていたものです。馬具や装身具は六世紀から七世紀にかけての横穴墓には一般的な副葬品です。鉄鏃は狩猟の道具で武器ではありません。

浜脇横穴墓の副葬品に土錘が出土することに注目されます。土錘は網の錘おもりで土器製の錘と須恵器の堅い錘の二種類があります。

古代別府地方はアサミ（朝見）郷と云われていました。アサミは海人族の安曇族のアズミが訛ったもので、内海の豊かな魚族を追ってきた安曇族の一部が、浜脇に定着したと仮説を立てる人もあります。浜脇横穴墓の被葬者は漁労に携わる海人族の流れをくむ者達だろうと云うのです。別府の弥生式遺跡から土錘が出土します。私は実相寺遺跡付近で幾つか採集したことがあります。

地形的にみて、朝見川の流域では広い豊かな田畑が営まれたと思えません。この地域に住んでいたハマワキやベツプの人々は専業の漁師で、海産物と農作物と交易していたのでしょうか。

歴史にアサミが初めて顔をだすのは『続日本紀』の「宝亀二年（七七二）五月二三日 速見郡敵見（朝

見)郷に山崩れ起こり埋めらるる家四三、死者四七人」と云う記録です。旧暦の五月ですから、おそらく梅雨の大雨で崖が崩れて土石流に襲われたのでしょうか。近世の記録でも、朝見川の氾濫で松原浦まで土石流が押し流したと云う記録があります。この宝亀の洪水で埋められた人々は、横穴墓と関係のある部族だったのではないのでしょうか。残念ですがこれ以上詳しい記録はありません。

当時の庶民が全て横穴墓に葬られたわけではありません。その他大勢の庶民は野山に土葬されました。庶民個々の墓が造られるようになるのは、江戸時代半ば過ぎからです。

私の「研究紀要」の末尾に「残された古墳の実測を今後も続けながら、分布や実態をもう少し緻密に検討すれば、あるいは浜脇地域の房戸・郷戸の集団を知る手がかりになるかも知れない」と書いていますが、三五年間全く手を付けなかったことに羞じいらいます。

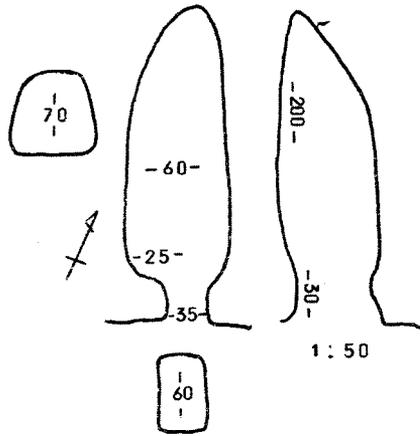
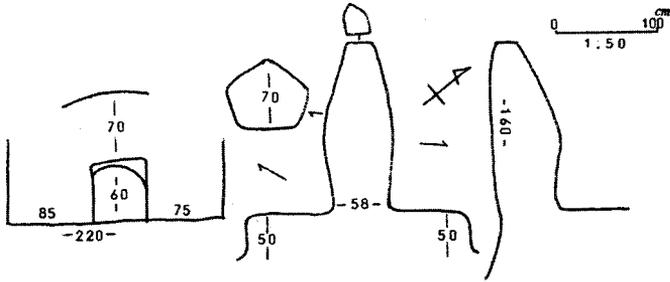
「別府市誌・昭八」の『上代遺跡』に鳥居博士は、鬼の岩屋古墳や浜脇横穴群の外に長松寺境内のドルメン、同寺の人面石、浜脇引臺ストーンサークル、石垣村立石平の立石たそいし、金比羅山頂上の大ストーンサークル、立石山の立石(メンヒル)、雛戸山の巨石遺跡、鷲岩、人面形メンヒルなどの巨石をあげています。その他に地元で大事にしている姫山メンヒルもあります。

現在では国指定史跡に指定された鬼の岩屋横穴式古墳以外は、考古学の埒外らちがいにおかれています。是非とも現代の研究の成果に基づいて真偽を明らかにして頂きたいと思っています。

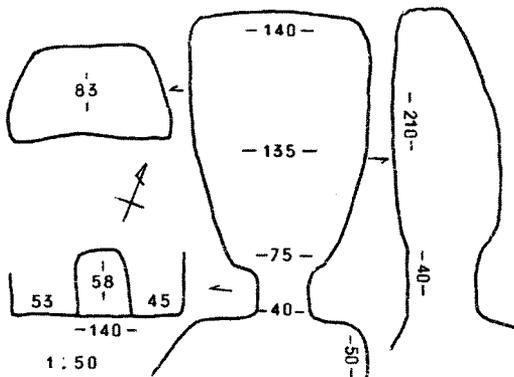
完

付録

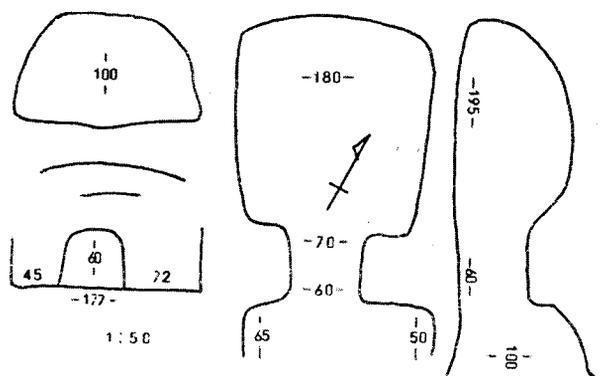
平原2号



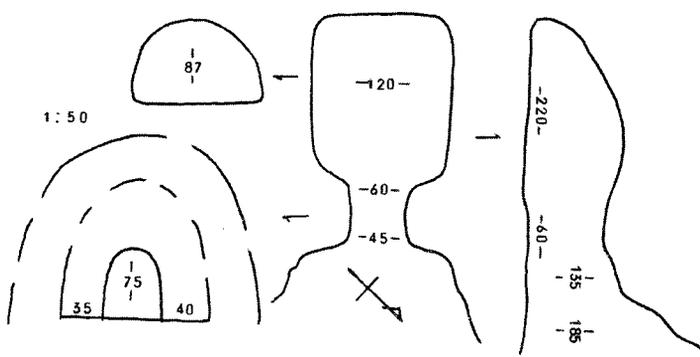
平原6号



平原7号



平原8号



金比羅2号

参考資料

市教委研究紀要 入江秀利

「浜脇横穴古墳の分布と実態」

「大分歴史事典・古墳・古代」

「別府市誌・昭8・60・平15」

「九州横穴の形式と時期」

考古学雑誌16ノ1 佐田茂